

<今回>365回目 2025年2月10日(月)14時10分～17時 602会議室

読書は3冊目「盗まれた神話」朝日文庫版 p38 説話と史実の間 より

<前回>364回目(25-1-13)出席者9名

資料1)第362回(24-12-23)のまとめ(清水)

2)龍谷大学保存、混一疆理歴代国都之図。行基図(清水)

3)日本書紀編纂メンバーの素性(高山)

A 報告 1月12日の多元の会では、中宮天皇について、すでに見解を表明していた3者が見解を出し合って、討論中心の方式に、清水、黒澤、服部の3者の見解を出し合う方式を試行した。当日の資料を回覧した。

発見当初、偽名説(代表例は東野治之)もあったが、今は本物説を前提に、丙寅年は西暦666年、清水は近畿勢力が、白村江の戦いに、九州倭国に動員された。その証拠は老齢の母や身重の太田皇女まで連れて西下したこと。実戦の白村江の戦いに渡海される状況を回避するため母(斉明)を死んだことにして、朝倉から引き上げたと推定。丙寅年666年までは母は生きていた証拠とした。中大兄は称制のままで政務をとり、多分667年に亡くなって、668年天智として即位したという日本書紀の記述から、簡明な論を出した。

黒澤氏は野中寺の弥勒像台座名の中宮天皇は九州王朝の斉明であるとした。服部氏は中宮名の資料調査を広く行い、その名称の起こりや、様々な資料を収集、九州王朝の関係者とみられる、候補者(仲天皇、伊勢王、等)を広く考えた資料を発表した。私は仮定が幾重にも重なり、無理が多いと感じた。

B 資料2) 会社の先輩である弘中義男氏が「邪馬台国」論争が盛んな頃、一部の学者が三国志時代の「魏」の対立国「呉」を牽制するため、卑弥呼の遣使を過大に評価した、という論のもととなった地政学概念を龍谷大学、混一疆理歴代国都之図を紹介し、この論の背景を示した。弘中氏は、この図は中世李氏朝鮮隆盛期の学者が書いた地勢図で三世紀の地勢概念と全く異なる事を示した。

3)高山氏が日本書紀の編纂者として挙げられた舎人親王以下、12人の活躍年、没年を表に纏められた。(これを作る作業は大変だったろう)この表に示された忌部小首は出雲国守として八年も赴任している、その間に出雲大社を建設している。出雲風土記の提出は733年であり、現地の国造らと、かなりのやり取りがあったと予想される。不比等の活躍既没年は720年であり、大きな関与が予想される。最長の広瀬王は722年まで生きているが、日本書紀にはこの項目以外は活躍の跡がない。忌部小首(719年没)、藤原不比等(720年没)らの関与が示唆される。

C 読書 P38 第2章 説話と史実の間

- 1) 戦後の古代史学者は津田史学の記紀造作説により、史実を見つけようとするのを深く研究してこなかった。
- 2) 「倭の五王」の雄略比定は好太王碑の倭軍の活動について、日本書紀の記す倭と全く関係がないことが古田の紹介で明らかとなった。(それでも現在は未だ、倭王武は雄略であるとしている。)
- 3) 川副理論は古事記は全く史実ではないとした(推古以前は史実ではない)。推古以降日本の史実と合うところをとる。(松下見林の読み方)という解決法に戻り、深い霧の中に埋もれてしまう事になった。

第365回 2月10日 14時10分から17時まで 602会議室

第366回 2月24日 14時10分から17時まで 603会議室